

② 行政整理と久米桂一郎、大島如雲、鈴川信一、増井兼吉、合田清らの退官

「学校近事」にも記されているとおり、昭和七年二、三月に文部省部内の行政整理（前年十一月三十日通達）を機として久米桂一郎、大島如雲、鈴川信一（生徒主事）の三教授と書記増井兼吉、嘱託合田清および教務嘱託員、雇、巡視、小使などが退職した。雇の宮坂福太郎も退職の候補に挙げられたが、彼は金工科の技術雇として長年同科のために尽くし、留任を望む声が強かったので、候補から外された。

この行政整理と期を同じくして正木直彦が退官し、本校は転換期を迎える。

退官した久米桂一郎については近年『久米美術館』（昭和五十七年、久米美術館）をはじめとして研究文献が発行され、業績が明らかにされつつあり、本書においても第一巻の「西洋画科設置」の項その他において度々その足跡について触れたが、なお、本校が彼を名誉教授（昭和七年六月一日称号授与）に推すために作成した「功績調査」が現存しているので、参考のため掲載する。

功績調査

元東京美術学校教授従三位勲三等 久米桂一郎

東京美術学校ニ於ケル功績

一、明治廿九年四月ヨリ東京美術学校ノ西洋畫ニ関スル授業ヲ囑託サレ同三十一年八月迄繼續ス

一、明治三十一年八月十三日東京美術学校教授ニ任セラレ昭和七

年二月三日依願本官ヲ免ゼラル 教授在官実ニ三十三年七ヶ月ナリ

一、右教授在官中ノ擔任ハ美術解剖學、西洋畫實習（木炭画）佛蘭西語ノ授業ナリ 美術解剖學ハ西洋畫學習ノ基礎的學課ニシテ久米教授ハ夙ニ之ヲ佛蘭西留學中ニ修メ来リテ本格的ニ初メテ我國ニ傳ヘ多年ニ亘ル本校在任中主トシテ此學課ヲ担当教授シ以テ我國ノ西洋画法發達ニ確固タル基礎ヲ與ヘタルモノニシテ其ノ功績ハ永久ニ顯彰セラルベキモノナリ

一、久米教授ハ明治十九年ヨリ同廿六年ニ至ル約七年間歐洲ニ於テ西洋畫ヲ研究シテ帰朝シ本校教授ニ任セラレタルモノニシテ故本校教授子爵黒田清輝ト共ニ佛蘭西ノ新畫風ヲ本邦ニ輸入シ之ヲ畫壇ニ樹立シタル先覚者タリ 西洋畫ノ教育者トシテ獨リ本校ニ於ケルノミナラズ一般的ニ於テモ其功績頗ル多トスベキナリ

東京商科大学ニ於ケル功績

一、明治三十七年九月十九日東京高等商業学校教授ニ兼任ヲ命ゼラレ同校豫備科ニ於ケル佛蘭西語ノ授業ヲ担任セリ 大正九年三月卅一日同校ヲ東京商科大学ト改稱セラル、ニヨリ同年四月一日同大學豫科教授兼任ヲ命セラレ昭和二年四月六日ニ至リ依



久米桂一郎

（『校友会会報』第3号より転載）

願兼官ヲ免ゼラル 兼務教授タルコト前後通シテ二十二年餘ナ
リ

博覽會關係功績

一、明治卅二年八月廿一日臨時博覽會鑑査官ヲ被仰付同年十一月五日教授ヲ休職ト為リ佛蘭西ニ渡航シ巴里萬國博覽會ニ自己製作畫ヲ出品シ歐洲各國ヲ巡歴シテ美術上ノ研究ヲ為シ卅四年五月帰朝ス 同月廿九日復職ヲ命ゼラル

一、同卅四年七月十七日農商務省ヨリ臨時博覽會事務局報告編纂事務ヲ囑託サレ同卅五年三月卅一日囑託ヲ解カル

一、同卅六年一月第五回内國勸業博覽會審査官ヲ被仰付

一、同四十二年二月廿一日休職ヲ命ゼラレ同年三月日英博覽會出品協會事務取扱ノ為メ英國へ出発ス 同年六月同博覽會事務局ヨリ心藝部審査擔任及美術部審査兼任ヲ命ゼラレテ從事ス

一、同年十二月洪牙利國「ブタベスト」ニ於テ國立美術博物館ニ開キタル日本美術展覽會事務ヲ處理ス 同四十四年三月帰朝シ五月廿四日復職ヲ命ゼラル

一、大正三年九月桑港萬國博覽會臨時出品部主幹ヲ囑託サレ同年十二月廿六日休職ノ上同四年一月米國ニ赴キ五年一月帰朝シ三月卅一日復職ヲ命ゼラル

美術審査委員會關係功績

一、明治四十年文部省ニ於テ美術審査委員會ヲ組織シ美術展覽會ヲ開設セラル、ニ際シ同年八月十三日其委員ヲ被仰付第二部員ヲ命ゼラル

一、明治四十四年同四十五年大正二年ノ三年間毎年美術審査委員

會委員ヲ被仰付

帝國美術院關係功績

一、大正十一年十月十六日帝國美術院幹事ヲ被仰付 昭和六年十月二日依願被免 在職九年餘ニ及ブ

教員檢定委員會關係功績

一、明治四十二年六月廿一日教員檢定委員會臨時委員ヲ被仰付爾後四十四年四十四年大正二年ノ三回臨時委員ヲ被仰付

官等及位勲

一、明治三十一年八月十三日高等官六等ニ敘セラル(初敘)

一、同四十年八月十九日高等官三等ニ陞敘セラル(累進)

一、大正十年七月一日勅任官ヲ以テ待遇セラル

一、同十四年四月八日高等官二等ニ陞敘セラル

一、明治三十一年九月三十日正七位ニ敘セラル(初敘)

一、大正三年三月三十日正五位ニ敘セラル(累進)

一、同九年九月十日從四位ニ敘セラル

一、同十四年十一月二日正四位ニ敘セラル

一、昭和七年二月十五日從三位ニ敘セラル(特旨)

一、明治四十四年六月十九日日英博覽會盡力ノ功ニ依リ勲六等ニ

敘シ瑞寶章ヲ授ケラル

一、大正五年九月廿九日勲五等ニ敘シ瑞寶章ヲ授ケラル

一、同十一年六月廿七日勲四等ニ敘シ瑞寶章ヲ授ケラル

一、昭和二年八月十九日勲三等ニ敘シ瑞寶章ヲ授ケラル 以上

久米の後任としては既に大正十五年に西田正秋が起用されてい

た。

鑄金蠟型の名匠大島如雲（本名勝次郎、別号一乘軒）は岡倉天心校長時代の明治二十三年から同二十九年まで雇ないし技手として起用され、正木直彦校長時代の同三十七年に嘱託教師として再起用され、大正七年に教授に昇格。作家としては東京彫工会、日本美術協会、日本金工協会、内外博覧会等で活躍した。退官のときは七十四才の高齢に達していた。

如雲のひとつとなりについては同僚として身近かに居た香取秀真の次の文が最もよく言い表わしている（参考図版省略）。

先生の東京美術學校に奉職されたのは、明治二十三年二月と履歷書にある。その當時の先生の様子を沼田一雅君などから聞くと、先生の机の脇には茶道具が置いてあつて、火鉢には鐵瓶が掛けてある。さうして時折茶を淹れ、菓子鉢から御菓子を出して私なども御馳走になつたものだ、といふことである。

校友會の華道部は石州流の大島先生が受持で、板谷波山君などが教へて貰つたといふ事である。衣類から履物迄が江戸前で、様子のよい人柄であつたので、同君たちは先生を今丹次郎と陰で稱へてゐたとの事。

令兄の安太郎さんが、仕事が早かつたのと反對に、先生は寧ろ遅い方ではなかつたかと思はれた。寒山拾得とも云ふべき牛肉のものを作りかけて、そのままになつてしまつた蠟型、（圖版一一）の牛肉の龍などは、何れも學校で作りかけたまゝのもの。（圖版

九）の龍首も歿後未完成のまゝであつたのを加納晴雲氏に依て青銅に移されたものなど、思ふやうでなかつたので放棄されたのであらう。花瓶や其他のものも中途半端でやめられたのがかなり多い様だ。その癖生徒が作りかねて居る小物などは忽ち作つて呉れた。六角紫水教授が學生當時印を作りかねて居た時、獅子鈕の印を忽ち作つて鑄物にまでして貰つた事があるさうな。私と同期の故榎井菊次郎君が學校の展覽會に何を出さうかと迷つてゐた時に、二三十分間に土筆に櫻花一二輪を添へた文鎖と其外何やらの蠟型を作られた。蠟を引きのばしてゐるから、何を作られるかと思つてゐると、枯蓮の莖に敗荷を著けて忽ち文鎖が出来る。蟹などもすぐ出来上る、見てゐる瞬間あざやかな蠟びねりで忽ちに出來あがる。

（圖版一三）の蛇は、嘗て加藤龍雄氏がどんなことにしたらよいかと先生に尋ねた。先生は直ちに蠟を採つて手のひらで板の上どころがして、一方は細く、一方は太い棒を造つて、蟠つて蛇となつたものを拵へて「コンナ風でどうか」と示されたものであるさうな。加藤氏はそれを鑄物にして大切に保存されてゐるのである。愚息正彦も蛇ののたくつて居る蠟型——手燭の執手——を藏してゐるのも同様の手本用のもの。

大正十年今の 皇太后陛下が東京美術學校へ行啓あらせられた。その當時教務係であつた鈴木信一君の先導、正木校長の御案内で工藝の方を御廻りなされた時、大島先生の蠟型の教室へ陛下を御案内申上げた。その時校長が「大島さん、何ぞ造つて陛下の御覽に入れては如何ですか」と云ふと、大島先生は直に傍の蠟

鍋の蠟を取つて何か渦巻のやうなものを拵へたが、忽ち蝸牛が出来たぢやないか、陛下もそれを御覧になつて、微笑ませられたさうである。(鈴川君談)

生徒が蠟型の出来かゝりを先生に見せると一日がかりで先生が作りあげてしまふ。ズルイ生徒はそれを承知して、わざと先生に預けてしまつて自分は遊んでゐる。

(香取秀真「大島先生の追憶」『大島如雲先生年譜』昭和十六年東京
鑄金会編・発行)

なお、「高村豊周先生と語る」(『鑄金家協会会報』高村豊周先生一周忌祈念号。昭和四十八年七月、鑄金家協会)の豊周と内藤春治の対談中には教師としての如雲を如実に語っている部分がある。

如雲は昭和十五年に八十三歳で死去したが、その年の十月には本校工芸科棟玄関前に新田藤太郎の銅像が建設された。

如雲の退官後、四月二十二日に至り、鑄造科に講師(鑄造実習、鑄造製作法担当)として採用されたのは丸山義男(不忘)で、彼は明治二十三年四月五日山形県米沢市生まれ。米沢中学校卒業後本校鑄造科に入学し、大正六年に卒業して香川県立工芸学校の教師となつたが、同十年辞任して西菓嶋町堀ノ内百六十二番地に鑄金美術工場を設けて経営にあつた。本校へは津田信夫の推挙により採用された。

鈴川信一の略歴と後任生徒主事佐々木卓については四二〇頁に記したとおりである。増井兼吉は帝国博物館を経て明治三十二年本校履、次いで同四十年書記となつた。同二十九年以降軍籍(近衛工

兵大隊)にあり、度々召集を受けて台湾、朝鮮、清国出兵に応じ、本校ではその軍隊訓練の経験を生かして生徒の修学旅行の引率にあつた。

合田清は明治十三年から同二十年に亙るフランス滞在中に西洋木版技法を修得し、帰国後は生巧館を起こしてその技法を教え、木口木版の名手として聞こえたが、本校では明治二十九年以降、単にフランス語の嘱託教師として遇された。本校に臨時版画教室が設置され、生徒の兼習が許可されるのは昭和十年であるが、それ以前から生徒の間には版画研究の動きが高まりつつあり、校友会に「椎の木の家」と称する版画クラブが出来、昭和三年二月十七、十八日に創作版画第一回展を開催した。合田は十八日に招かれて「西洋版画に就いて」と題して講演しており、その概要が『東京美術学校校友会月報』第二十六卷第八号に掲載されている。

③ 正木直彦の退官と赤間信義の校長事務取扱就任

昭和七年三月三十一日、正木直彦が校長を辞し、文部省専門学務局長赤間信義が校長事務取扱となつた。正木は三十一年間校長をつとめ、その間、正木の美術学校と称されるまでに本校は彼の統率の下に進展を遂げたが、彼に匹敵するような後任の人材が無く、また、場合によっては美術界に波瀾を巻き起こす恐れも多分にあつたので、各方面から異論の出ない人物が選ばれるまで、正木と意思の疎通のある赤間が暫定的に後任をつとめることになつたのである。

正木校長時代を象徴する『東京美術学校校友会月報』の最終巻(第三十一巻第一号)の巻頭を飾るのは正木と赤間の挨拶の辞である。